南台科技大學夏令營（サマーキャンプ）における実習活動

—國學院大學学生による活動を例として—

神作晋一[32]

要旨

本発表は、南台科技大學應用日語系で行われている夏令營（サマーキャンプ）について述べるものである。このプログラムは、國學院大學の大学院生・学部生と引率の國學院大學の教授を講師として招き、本学の学生が受講する形の語学研修（日本語教育実習）として行われている。2006年からこれまでに4回行われている。南台科技大學のカリキュラムである「外語實務實習」のひとつとして開催されているものでもある。

筆者はコーディネーターとして、準備段階では日程の調整・宿舎の手配・授業計画のサポート等を、キャンプ開催中は教室の手配・授業へのアドバイス・生活面でのサポート等を、学科のスタッフに協力を得ながら行ってきた。

キャンプの運営については、関係各機関の都合やさまざまな制約により不都合な点や困難な事柄もある。また、普段の授業とは違った異文化交流の機会にすべきなのか、あるいは日本語教師養成のための日本語教育実習に近づけるべきなのかという問題もある。

しかし、互いにとって、キャンプ開催によって交流を持つことは非常に有益であり、今後、このイベントがよりよい形で継続していくことが期待されている。

[32]南台科技大學應用日語系助理教授

キーワード：外語實務實習、サマーキャンプ、コーディネーター、国際交流、日本語教育実習

About management and internship activity by Kokugakuin University Student at summer camp in Southern Taiwan University

KANSAKU, Shinichi

南台科技大學夏令營（サマーキャンプ）における実習活動
——國學院大學学生による活動を例として——

神作晋一

0．はじめに

本発表は、南台科技大學應用日語系で行われている夏令營（サマーキャンプ）について述べるものである。このプログラム[33]は、國學院大學の大学院生・学部生と引率の國學院大學の教授を講師として招き、本学の学生が受講する形の語学研修（日本語教育実習）[34]として行われている。2006年からこれまでに4回行われている。筆者はコーディネーターとして、また学科のスタッフとして、このプログラムに関わっている。

ここでは、このプログラムの概要、特徴、問題点などを述べるが、細かい点は、主に筆者がコーディネーターとして関わった2007年の回を中心に述べることとする。

なお本論の約束事として、國學院大學側の学生を「実習生」とし、南台科技大學の学生の方を「受講生」とする。

1．本プログラムの概要

1.1.サマーキャンプとは

本プログラムは、南台科技大學（以下省略する際は「南台」）がカリキュラムの一つとして定めている「外語實務實習」の一つとして毎年、夏期休暇（夏令營）・冬期休暇（冬令營）に開催されている集中語学研修である。その講師として國學院大學で日本語学を専攻する大学院生を中心とした学生を招き、日本語教育実習を行ってもらうというプログラムが2006年より開始され、これまで4回行われている。

1.2.準備から開催直前まで

例年のスケジュールを簡単に述べると以下のようになる。

4月くらいから日程の検討が本格的に始まり、5月の中旬ごろ日程が決定する。その後、國學院大學側では、参加する実習生の募集と渡航のための事務手続きや授業内容の検討などが行われ、南台側では参加する受講生の募集、宿舎の手配・調整などを行う。國學院側は夏休みに入ってからは週1回（直前は週2回）、授業案等で学生と引率教員（あるいは学生だけで）ミーティングを行っている。7月下旬からは担当（神作）も帰国して何度か参加している。あわせてメーリングリストを立ち上げ、参加者同士の情報交換とコミュニケーションの強化に努めている。

1.3.キャンプ開催の期間中について

キャンプの行程は次の通りである。主に8月下旬ごろから、国学院大学側の一行が台湾・南台科技大學に着き、ほぼ2週間、実際には11日間の授業等を行い、帰国するという日程である。11日間の内訳は、一日当たり午前9:00～12:00の3時間、午後13:30～16:30の3時間で計6時間、11日間で総計66時間（66コマ）の授業を行うという編成である。

なお、参加の学生は、参加費3,000元（10,500円[35]）が必要で、期間中、全体の6分の1以上の欠席があると単位は認定されないというのが条件になっている。

[33] このプログラムは、2007年、2008年においては日本女子大学を招いた方のプログラムとセットになっている。しかし、この論文は特に國學院大學側が担当した実習について述べるため、日本女子大学側の実習については報告内容の必要に応じて述べるにとどめることする。

[34] 南台科技大學（應用日語系）側としては「夏令營（サマーキャンプ）」であるが、國學院大學側としては「日本語教育実習」となる。

[35] 1元（INT$）＝3.5円（2007年当時）として計算。以下同じ。

実習生が担当するクラスは、おおむね２クラス 60 名くらいとなっている。本学の應用日語系（日本語学科）の学生によるクラスと他学科によるクラスもある。2007 年、2008 年は日本女子大学側とクラスを分けた[36]が、國學院側が担当した２クラスの分け方については、コーディネーターからの学生情報を実習生側で検討して、レベルの上下で分けたり、あるいは、どちらにも同じレベルの学生が配分される[37]ように分けたりしたこともある。

毎日の実習後は、國學院大學の実習生と引率の教授、南台の担当が参加で１時間程度（17:00～18:00 くらい）のミーティングを開いた。実習記録等は、後日の報告書の作成[38]を見越してまとめている。

２．南台科技大學におけるキャンプの位置づけ

2.1.キャンプの性質

南台科技大學では、2002 年３月に学生の外国語力（英語・日本語）を高めるために「外語實務實習」という科目を設け、その単位取得のひとつとして冬期休暇・夏期休暇にウインターキャンプ・サマーキャンプという語学研修を始めた。應用英語系が窓口となるが英語のキャンプ、應用日語系が窓口となるのが日本語のキャンプである。ここでは應用日語系が窓口となる日本語のキャンプについて述べる。

キャンプは授業の形態をとるが、講師は必ずネイティブ（この場合は日本語母語話者のこと）であることの他、次のような特色をもつ。

１．小グループで勉強し、グループ内で討論をする。

２．楽しみながら外国語を習得する。

[36] 2007 年は、日本女子大大学側が非日語系（非日本語専攻）の２クラス（計 60 名）を担当。

[37] たとえば、上位 10 名、下位 10 名がいれば、両クラスとも上位・下位が５名ずつ配置されるような編成にするということ。

[38] 実際には、2007 年の分が公式に冊子になっただけである。

３．緊張やプレッシャーのない環境で学習する。

４．外国語を通して異文化に接触する。

５．学習を楽しむことに重点を置くため、いわゆる「講義形式」の授業に伴うようなプレッシャーを排除する。

要するに「普段の授業とは違う雰囲気の中で、ネイティブと接して楽しく外国語と文化を学ぶことができる。」というものである。これは、学習者が体系的に日本語によって日本語以外の科目を学ぶということから、いわゆる「イマーション・プログラム（immersion program)」[39]に相当するものである。

大学生以上の学習者を対象とした日本語教育におけるイマーション・プログラムにはネウストプニー（1995）にあるオーストラリアのモナシュ大学の例がある。モナシュ大学の例では参加者の中に先輩の学習者が入ることがあり母語を避けることに神経質になる必要はないとなっているが、南台のキャンプの場合も、学習者の先輩に当たる上級生（大学院生など）がＴＡとして参加しサポートに入るということになっている。（ＴＡについては後述する。）

2.2.講師の選定

さて、ここで問題となるのは講師の条件に挙げている「ネイティブ」ということである。

それまでは、この「ネイティブ」の講師を確保するために学科のツテを頼って講師を派遣してもらっていたが、それは在台の日本人留学生（近郊の他大学）であった。

ところが、それらの講師はキャンプの趣旨を理解し真摯に取り組んでくれる方もいたのだが、仕事ぶりとして疑問符がつくような姿勢の講師も少なくなかった。もちろん、南台の側も日本語学習者を前にして授業を行った経験のない講師に対して具体的にどうしてほ

[39] たとえばネウストプニー（1995）によると、イマーション・プログラム（immersion program）はもともとヨーロッパにあった「二重言語学校」に端を発するという。カナダなどのフランス語教育の一形態としても知られている。

しいかという指針が明確ではなく、客分として非常勤講師を迎えるのと変わらない対応で、授業に対するサポートも決して十分ではなかったため、そうした講師だけに全面的に非があるわけではない。しかし、いずれにしても受講生の反応は芳しいものではなかった。

そこでまず、2004年には日本語教育を志望あるいは専攻する明海大学外国語学部日本語学科の学生6名によるサマーキャンプ[40]が、一定の成果を得た。しかし、諸般の事情により次年度以降へも継続とはならず、一度は従来の形にもどることとなる[41]。

その後、本学学長の國學院大學渋谷キャンパス訪問や久野マリ子教授を迎え集中講義を行ったことなどの関係から、2006年8月に諸星美智直教授（國學院大學文学部）を引率指導教員として國學院大學の大学院生6名（主として日本語学専攻）による日本語教育実習が行われ、年度によっては日本女子大学のグループが加わるなどして、続けられている。

2.3.実習単位について

先に述べた「外語實務實習」は2002年3月に設けられ、2001年9月入学生[42]より3単位を取得することが卒業要件となった。

「外語實務實習」の単位は、下記のいずれかの方法で取得することとなっている。

1．冬期休暇および夏期休暇を利用し、英語もしくは日本語を使用したアルバイト（事前に大学に申請し、承認を得なければならない）を最低週5日で6週間以上して、その後、大学内の筆記試験および口頭試問で一定の成績をとった場合。（1単位）

2．英語もしくは日本語の論文を執筆し発表した後、大学内の口頭試問で一定の成績をとった場合。（1単位、これは1回限り。）

3．南台科技大學で実施する英語もしくは日本語の集中語学研修に参加した場合。（1単位）

4．冬期休暇および夏期休暇を利用した南台科技大學の姉妹校短期留学に参加した場合。（1単位、2週間以上の留学は2単位）

5．全国規模での校外の外国語コンテスト（スピーチコンテストや作文コンテスト）に、教員からの指導を一定期間以上受けて参加した場合。（1単位）

6．その他、学科が実習単位と認めた場合。（1単位、あるいは0.5単位など）

条件1は仕事で使える日本語能力を持った学生となると、専攻者であってもハードルが高く該当するアルバイト自体を探すことも少々困難である。条件2は外国語（日本語）で一定水準の論文を執筆・発表するだけの日本語能力を持つ学生は限られている。条件4はたしかに希望者は多いものの留学の費用もそれなりにかかるため断念せざるを得ない学生がいる。条件5も高度な日本語能力と継続的な準備が要求されるため限られる。条件6は国際的な学会の手伝いなどハードルの低いものもあるが、仕事自体も不規則に発生し募集される人員も少数である。

以上のような事情で、多くの学生にとっては条件3を満たすキャンプに参加して単位を得ることが現実的であり、そのようにしている学生が多数である。

表1　参加実習生の内訳

実施年		大学院生 日本語学専攻	大学院生 他専攻	学部生(文学部) 日本文学科	学部生(文学部) 他学科	計	担当クラス数
2006	男	3				6	3
	女	2	1				
2007	男	2(2)		1	1	10	2
	女	2(1)		3	1		
2008	男		1	1	1	6	1
	女		2	1			
2009	男	1		1	2	6	2
	女		1	1			

※()は06年度参加者内数

3．実習生について

[40] 詳細は飯田明美（2005）に報告がある・この論文も一部同論文を踏襲している・

[41] ちなみに・以前も提携先の別の大学の実習生が来台して実習を行ったことがあるが・続かなかったようである・

[42] 各系（学科）によって（「外語實務實習」を）採用するかどうかは分かれる・

3.1.学年・専攻

キャンプに実習生として参加している学生は、主として國學院大學で日本語学あるいは日本語教育学を専攻とする大学院生・学部生である。

國學院大學では、伝統的に中学校・高等学校における教員養成の実績があるが、日本語教育となると文学部日本文学科のカリキュラムで「副専攻」として学ぶという体制になっている。

2006年に初めて実習生6名が南台に来た時は、全6名のうち、大学院の日本語学専攻の学生が5名（博士4名、修士1名）、伝承文学専攻の学生が1名（修士）であった。この時は初年度であるということもあり、募集の段階でも（中学校・高等学校などで）少なくとも教育実習以上の経験がある大学院生に絞るということにした。

2007年以降は、大学院生に加え、学部生からも募集をした。その理由は、前年度は3クラスを6名で担当したため予想以上に負担であったこと、また当該年度の大学院生で標準修了年度を迎える学生が多く実習希望者の不足が懸念されたことなどがあったためであった。

募集の方法は、まずは、引率の教員から内々に声をかけ、その後、日本文学科の教員が担当の授業などを通じて告知し、参加説明会を行うというものである。たとえば2007年は参加説明会の後、前年度キャンプ経験者の大学院生を交えた面接[43]も行ったということがある。その後も、日本語学・日本語教育学専攻の大学院生、他学科の大学院生、日本文学科の学部生、他学科の学部生という順に募集している。

なお2クラスを10名では「人数が多すぎるのではないか」という懸念もあったが、実習生が暇を持て余したり学生が混乱したりする

[43] 一定期間共同生活を行うわけなので、それに適応可能な人物であるかの見極めも行ったようだ。片桐史尚（2002）によれば、「研修期間中に起こる学生間の軋轢は珍しいことではなく、このことから研修そのものが台無しになるといった例は枚挙に暇が無い。」という。

ことはなかった。

3.2.実習生の待遇

南台科技大學では、期間中実習生に対して、主に、滞在先とTAの用意、そして講師料の支給[44]を行った。

実習生の一行はキャンプ開始の前日までに、南台科技大學に到着する。2006年度までは、諸事情で移動のスケジュールに問題がある年もあった[45]が、たいていは全体で日本から来台となるので、南台側は高雄国際空港や高鐵台南駅まで迎えを手配するということを行っている。

滞在先は、南台科技大學で学生寮（第六宿舎）を用意している。学生寮は4人部屋である。上がベッドで下に個人の机があり、クローゼットとトイレ・シャワールームもある。その他、内線電話（外線着信可）があり、一部連絡が可能である。寮の滞在費については、実習生側に負担してもらうことになっている。

2007年の場合は、新学期に来る学生のために開け渡す時期になってしまうとのことで、交渉の甲斐もなく、途中からは大学近くのホテル（康爵大飯店）[46]に移動してもらわざるをえなかった。しかし、事情が事情とはいえ、宿舎の移動に伴う労力と費用の負担[47]を國學院側にお願いせざるを得なかったことは、今後の改善課題の筆頭[48]に挙げられるものである。現状では学生寮と教員宿舎の利用が望ま

[44] 渡航費は実習生・引率教員側の負担である。
[45] 2004年度は台北から長距離バスでの移動、2006年は引率教師を含めた7名の到着パターンが4通りと、お互いに負担となる事態であった。
[46] ホテルの方は4人部屋とのことだったが、ダブルベットが2つあるタイプの4人部屋であった。2人部屋とされたのもダブルベットが1つあるタイプの部屋であった。入室する日に気づくという担当の確認不足ではあったが、そもそも台湾では通常の人間関係においてダブルベットを使用するのに抵抗がなく、これについては（実習生に）驚かれたが、滞在費の節約という面から納得してもらうほかなかった。
[47] 結果的には期間の後半滞在したホテルへの支払いでほぼ相殺されてしまった。
[48] その後、学長から、今後退寮期限にかかる場合でも配慮するようにというのが関係部署に通達されたという。ちなみにその後の2回は日程が退寮期限にかかっていない。

しいので、学科としては関係各所への理解を求める努力をしていく必要がある。

実習生の授業や生活面でのサポートを行うことになるＴＡ（ティーチング・アシスタント）については、開講クラス１つにつき１人チューターをつけることができるのだが、2007 年当時の規定では國學院側が担当する日本語学科のクラスにはつけることができないとなっていた。しかし、それでは心もとないということもあって、同じ時期に開催する日本女子大学側が担当するクラスと調整を行い、どちらにも配置できるようにしていたこともあった。その他、期間を通して事務室付きのＴＡが１人おり、最低でも２人以上はいるという体制をとっている。ＴＡは應用日語系の４年生や大学院生などに引き受けてもらっている。

４．実習状況について

4.1.担当クラス・レベル

クラスの分け方は、應用日語系（日本語学科）の学生の場合、普段のクラス、日本語能力試験の取得級、各教員からのヒアリングなどで決定する。非日本語学科の場合は、日本語学習歴や日本語能力試験の取得級などを基準に行っている。実際の決め方は、あらかじめ、コーディネーターの方で決める場合もあり、実習生側に任せる場合もある。

多くの場合は、習得レベルに応じて線引きすることになる。しかし、2007 年の場合、２クラスの分け方については、学科の各教員からのヒアリングを含めた担当（神作）からの学生情報と初回ガイダンス終了後の印象などを総合的に実習生側で検討した結果、レベルの上下で分けるのではなく２つのクラスが「どちらにも同じレベルの学生が配分される」[49]ように分けた。

このときは「媒介語を介さない日本語のみの授業であるため、上位の学生が、そうでない学生を助け、互いの向上を促すこと、またレベルの差に左右されず同質の授業を行うこと」[50]をねらいとして、グループワークで上位者が作業をリードしスムーズな授業の進行ができていたが、クラス分け自体は「友達と一緒にならなかった」[51]というような理由で不評だったようである。

コーディネーターや引率教員の意見を検討しながらも、最終的には実習生の判断で編成をすることになるが、何らかの形で説得力をもったクラス編成が求められる。

4.2.授業計画・編成

授業は、例年、午前あるいは午後の３時間を一つの単位として、一日に２種類の授業を行う編成である。

2007 年の場合、それぞれメイン担当を１人決め、２人程度がサブ担当となる。その他が見学・サポートに入った。つまり１クラスに５名ずつくらいが配置され２つの組ができるということになる。たとえばＡとＢの二つのクラスがあれば、その日の授業担当の一組は午前中Ａクラスを担当し、午後はＢクラスを担当する。もう一つの組の担当はその逆ということになる。教室の設備や準備等を考え、実習生を教室に固定し、受講生の方が午後は教室を移動するという方針を取った。

実習生は１人必ず１回はメイン担当として授業案を考え実行することにしたが、埋まらない分は大学院生が２～３回をメイン担当となる計画にした。

教室は南台科技大學の学科の事務室もあるＮ棟の教室で、原則的

[49] たとえば、普段の上位クラス 10 名、下位クラス 10 名がいれば、両クラスとも上位・下位が５名ずつ配置されるような編成にするということ。
[50] 久野マリ子編（2008）の「授業外の諸作業に関して―報告と提言―」の項。
[51] もちろん、どのような分け方をしても不満は出てくるのだが、可能な限り対応する、という姿勢である。

に普段は聴解や通訳の授業に使われるタイプの教室を使った。しかし、授業形態や使いたい機材などの実習生側の都合、また、校舎の管理側による新学期を控えた教室のメンテナンスやエアコンの不良などの理由で、その都度移動することもあった。N棟の教室はコンピューターなど設備の都合で飲食禁止が原則なので、料理を作る授業やさよならパーティー（飲食の機会がある）では通常の教室がある隣のT棟へ移った。

4.3.授業の実際

実際の授業の進行としては、①メイン担当からその日のテーマの導入・概説②３～５名くらいのグループワーク③サブ担当や見学者もそれぞれグループに助言して作業の促進をする、というがほとんどだった。ここでは、一つひとつ細かくは述べないが、本論の末尾にある資料１には、2007年の授業のテーマ[52]と短い概要が一覧になっているのでご参照いただきたい。

なお、授業の様子・その他は実習生によりビデオカメラ（映像）やデジタルカメラ（写真）に収めており、2007年の場合、一部は國學院大學の公式ウェブサイトでも紹介された。ビデオ映像を使ってその日のうちに反省、というところまでは行かなかったが、次年度以降の実習参加者にとっては、イメージを知り、教案を作成するうえで貴重な資料となりうる。

実習生の動向を述べると、大学院生は教育実習の他、高校や予備校等で講師の経験のある者もいて、細かいところは別としても、手際の良さなどが目立った。

一方、学部生でまだ教育実習の経験もないという学生の場合は、もちろん準備はしてきているものの、それが結果的に授業に活かせるレベルにはなっていなかった。たとえば、説明を始めてもなにをどのタイミングで板書するかなどを決めていなかったことや、そも

[52] いわゆる「言語能力」だけでなく、「社会言語能力」や「社会文化能力」を養成するような内容になっている。

そも話しながら板書するという余裕もなくサポートに入る実習生が慌てて書き出すというようなこともあった。

それでも、時間の経過につれ、サブや見学の実習生のサポートを得ながら、なんとか授業を成立させていったように思う。

どのように準備をしていったらいいのかなどは、もちろん双方の指導教師や大学院生などの指導や支援が必要であるが、実習生にとってみれば、実際にやってみて初めて「授業」というのを実感するというものであろう。

それでも、あまり不完全な状態で進行させるわけにも行かない。現状では、國學院大學の方でも教育実習を見据えたカリキュラムが体系的になっているわけでもなく、かといって南台側での指導も体系的にきまっているわけでもない。そのため、今後も双方で検討しながら、指導・サポートの体制を改良してゆかなければならない。

また、南台の学生、特に日本語学科の学生にとっては、これまで学んできた日本語が教師以外の日本人とのコミュニケーション・インターアクションに使えるかどうかという場でもある。受身ではなく積極的な参加が望まれる。普段の授業とは違うが、意義のあることとして認識させる工夫をしなければならないだろう。

4.4.ミーティング

毎日の実習後は、國學院大學の実習生と引率の教授、南台の担当が参加して１時間程度（17:00～18:00くらい）のミーティングを開いた。

2007年の場合、２つの授業について、まずメイン担当が授業内容と感想・反省・改善案などを述べたあと、サブ担当、見学・サポートも同様に感想・反省・改善案などを述べる。その後は久野マリ子教授と筆者が感想・改善案などを述べ、最後に明日に向けての申し送りや連絡事項などを通知して終了した。実習記録等は手書き原稿を含めメイン担当が取りまとめることにした。改めて授業計画と含め報告書の原稿を作るよう引率の久野マリ子教授から指示があり、

後日の報告書作成[53]に備えた。

4.5.教室外・学校外で

その日の授業とミーティングも終わると自由時間になる。一部の実習生は学科の事務室で作業をしたいと申し出ることもあるが、それ以外は一度宿舎に戻る。その後は食事をするために外へ出たり、宿舎で授業の準備があったり、さらには洗濯等をこなす場合もある。

ところが、実際はそれだけではなく、受講生からの夕食を兼ねた誘いなどもある[54]。実習生と受講生との授業外の交流については、双方の指導教師との申し合わせで、翌日以降に支障が出ない程度であることなど最低限の注意を促した上で、ある程度は容認している。

2007年の場合、実習生には前年度からの連続参加がおり、また南台の学生も連続参加という者もいる。キャンプ開催までに定期的あるいは不定期にメールのやり取りを続け今回の再会を心待ちにしていたようである。初めて参加の実習生や同じく初めて参加の南台の学生も含め、授業以外での交流も進んでいった。

その他、授業のない土曜日・日曜日は、久野マリ子教授・担当の神作を含め市内の観光やショッピングに出かけたこともあった。その際は、ＴＡや学生（キャンプへの参加不参加にかかわらず）も入り乱れて、楽しくにぎやかに過ごすことになった。

5．指導教師の役割・仕事について

5.1.南台科技大學側の教員の仕事

ここでは南台科技大學側のコーディネーターとしての仕事について述べたい。

まずは担当の決定から始まる。2007年には國學院大學、日本女子

[53] 後日「久野マリ子編（2008）」となる・
[54] 誘いを受ける場合も・南台の学生同士の人間関係等に配慮しなければならないこともあるようである・

大学、と２つの大学によるキャンプが実施されたが、一つの大学につき担当１人という形をとっている。現時点では、キャンプが夏季休暇中の仕事として、進修部（夜間部）やエクステンション講座の夏休みの授業とあわせ、日本人教員のローテーションで（担当が）回ることが了解されている。担当の教員同士で毎年引継ぎの作業があり、必要な仕事を確認するという作業から始まる。

実際の仕事は①開催日程の調整②受講生募集③大学側との折衝・確認④その他雑務などがある。

5.2.開催日程の調整

日本の大学では７月末まではテスト期間になっており、お盆休みを含めた前後は事務も休止となることがある。そのため、キャンプの実施時期としては８月17日くらいから第２学期の始まる９月25日くらいまでの約５週間の間にすることになる。

南台科技大學側の都合としては、９月の第３週(15日～21日ごろ)から新学期が始まるので、宿舎として予定している学生寮は、新学期開始の１週間前までに入寮の学生に明け渡さなければならないということがある[55]。

以上を考えると、８月20日くらいから９月10日くらいまでの間に２週間前後の日程を組むことになる。その他、引率教員のスケジュールや、あとで述べる参加実習生の状況などで日程を決めることになるが、どうしても新学期開始直前にかかる場合は宿泊場所に関する調整や折衝が必要である。

なお、日本の大学は新学期開始が４月であり、ＧＷをはさむため、日程の正式決定の時期は早くても５月中旬となる。そこから南台側ではキャンプの参加学生(受講生)の募集が始められることになる。

[55] 今後・大学間の協定などが進めば・学生寮の継続使用が可能になるかもしれないが・現時点では新学期開始にかかれば使用に差支えがでると考えておく方がよい・

5.3.受講生募集

日程が決まったところで受講生の募集を行う。受講生の募集告知については、應用日語系ですでに定型フォーマット（資料２）ができているので、必要な情報の加除・修正ですむ。

クラス数は、日語系・非日語系２クラス（60名）ずつが目処となる。南台の学生の希望があれば追加も可能だが、現在の教室の数や、来台する実習生の数などを考えると、日語系・非日語系３クラスずつぐらいが限度だろう。

募集が終了次第、学生の情報を実習生側に伝える。そのために日語系の各教員[56]にヒアリングを行い、必要に応じて成績や音声データの提供も受けて、応募した学生のレベルの把握を行う。非日語系は名簿から所属学科や学習歴を調べるが、実習生（派遣元の大学）側からの要望も聞いた上で、募集の段階で申込書に何を書いてもらうか考えておく必要がある。

5.4.大学側との折衝・確認

（南台の）大学側との折衝は「宿舎」と「教室」について行うことが必要である。

宿舎については、実習生の人数・性別が確定した後、部屋数・使用料などの交渉をする。実際の交渉は学科の事務方（助教など）に依頼し、さらに難しい案件は学科主任を通して折衝にあたる。その結果・動向を、日本の引率教員や実習生側にメールなどで伝える。なお、キャンプ期間中の寮に関するトラブルとしては、シャワーなどの水周りの問題、エアコンの設定などがあったが、ＴＡを通じて寮の管理人との交渉をお願いして、問題の解決に当たった。

教室については、期間中の日中は原則、学科事務室のある棟（N棟）のすべての教室が使えることになっている。あらかじめ授業内容に応じて使いたい教室の希望を助教に告げて鍵の管理なども行う。食品を扱うようなものは通常の教室を使うため、別の棟に移動する。

[56] もちろん・担当自身の見解も含む・

また、期間中は新学期を控えたメンテナンスが順番に入る可能性があるため、助教を通じて確認しておく必要がある。

教室設備の使用については、実習生にとっては勝手がわからず難しいため、普段使い慣れているコーディネーターの教員の力が必要である。それでも手に負えない場合は、校舎のメンテナンス担当に学科の助教などを通じて機械のトラブルの解決をお願いすることになる。

5.5.その他・雑務など

上記の仕事の他、こまごまとした雑務が発生する。授業にかかわるものと、引率教員・実習生の生活面と両方がある。

授業にかかわるものとしては、学生の出欠や評価などの最終チェック、必要な物品などの手配、授業進行上のアドバイス、連絡事項の伝達などがある。

引率教員・実習生の生活面については、必要な情報の伝達、買い物や両替の代理、交通案内などがある。

こうした仕事の多くは、担当自身だけでなく、学科の助教、ＴＡなどに任せられ、実際に任せることも多い。

しかし、この中で特に大事なのは成績のチェックである。実習生・引率教員による評価と、南台側の成績の考え方をすり合わせて行く作業が必要である。

また、授業についてのアドバイス・指導などは、現時点では引率教員の意向もあるので一概には言えないが、少なくとも求められればするか、あるいは緊急を要するものなどについてはすることになる。これは今後、双方の指導体制や内容についての折衝で改良してゆくことは可能である。

以上、主な仕事を挙げてみたが、準備段階から引率教員と電子メール等で逐一情報を交換する必要がある。細かい情報でもできるだけ文章に残しておく方がよい。緊急の場合は電話連絡（国際電話）等も必要になってくるだろう。

6．プログラムの問題点

ここまで、本プログラムの概要や経過を述べてきた。大きく成果を上げる一方、細かいところでは問題点もある。ここでは、終了時に実施したアンケートを紹介しながら、（授業以外のことも含めて）問題点と解決方法を述べていきたい。

その前に、キャンプへ参加した受講生へのアンケート（表２）について紹介したい。アンケートは 18 の項目について行い、47 名からの回答を得た。

表2 キャンプ終了時のアンケート

	有効回答数＝47名 (N=47)	有効回答数						設問別回答率						
		非常良好5	良好4	普通3	差2	非常差1	無回答0	非常良好5	良好4	普通3	差2	非常差1	無回答0	
1	教學內容份量充實。	13	29	5	0	0	0	27%	60%	10%	0%	0%	0%	4.17
2	按學生學習情況，調整教學內容，進度。	8	33	6	0	0	0	17%	69%	13%	0%	0%	0%	4.04
3	會配合實例或引用輔助講義，使教學生動有趣。	22	23	2	0	0	0	46%	48%	4%	0%	0%	0%	4.43
4	上課的教材適合我的程度	12	28	7	0	0	0	25%	58%	15%	0%	0%	0%	4.11
5	教學方法具多樣性。	20	25	2	0	0	0	42%	52%	4%	0%	0%	0%	4.38
6	鼓勵學生發問，討論。	22	23	2	0	0	0	46%	48%	4%	0%	0%	0%	4.43
7	授課方式，容易精神貫注、學習投入。	18	20	9	0	0	0	38%	42%	19%	0%	0%	0%	4.19
8	授課條理分明，深入淺出。	20	16	11	0	0	0	42%	33%	23%	0%	0%	0%	4.19
9	課程準備充份，教學認真。	28	18	1	0	0	0	58%	38%	2%	0%	0%	0%	4.57
10	和學生相處融洽，上課氣氛良好	32	13	2	0	0	0	67%	27%	4%	0%	0%	0%	4.64
11	耐心解答學生的疑難。	30	17	0	0	0	0	63%	35%	0%	0%	0%	0%	4.64
12	會欣賞學及分享學生的學習表現和成果	29	17	0	0	0	1	60%	35%	0%	0%	0%	2%	4.53
13	確實批改學生作業、報告或考卷	28	19	0	0	0	0	58%	40%	0%	0%	0%	0%	4.60
14	本課程的學習可以激發我進一步學習相關課程的興趣。	22	18	7	0	0	0	46%	38%	15%	0%	0%	0%	4.32
15	關於此次夏令營訂定的日期和時間。	3	9	21	12	2	0	6%	19%	44%	25%	4%	0%	2.98
16	關於此次夏令營的上課教室。	6	14	20	5	2	0	13%	29%	42%	10%	4%	0%	3.36
17	關於此次夏令營的分組。	9	16	14	5	3	0	19%	33%	29%	10%	6%	0%	3.49
18	經由此次的夏令營、是否加深了對於日文・日本文化的興趣	18	22	7	0	0	0	38%	46%	15%	0%	0%	0%	4.23
														4.18

５段階評価で、どの項目も（平均が）４点台となっていて、おおむね好意的にとらえられている。これは、実習生の努力と奮闘、コーディネーターやスタッフのサポート等の甲斐があったというものである。

しかし、15（開催日程と時間）、16（教室）、17（クラス分け）については、評価が低かった。これらについては、このあと述べる。その他では、項目２の穂床が若干低いが、これは前年にも参加した

学生からの「昨年と同じような授業だった」という点で、評価が少し下がったということである。

6.1.開催時期

南台側の受講生にとっては、その開催時期について不満を抱く者もいるようである。学生としては実家から離れて大学に通う者が多く、また、休み中の学生寮の利用については改めて申請が必要ということもあり、（学期中とは連続しない）夏休み期間中に通うのを嫌がるようである。南台の学生としては、できれば２学期終了直後の６月末～７月初旬の開催を希望している。

しかし、「5.2.開催日程の調整」でも述べたように、日本の大学はちょうどその時期、授業やテストがあるため、台湾に招くことは困難である。

そのため、これまでも新年度開始に近い８月後半から９月初旬の開催を目指すよう努力してきており、現時点ではそれが最良といえる。

6.2.時間数

キャンプの時間数は大学の規定で 50 分×66 コマと決められている。そして、一日あたりの時間数は午前・午後に３コマずつの計６コマを 11 日間ということになっている。

しかし、ここで問題がある。（引率教員を含む）実習生側は滞在日数を出来るだけ少なくしたいという意向で、２週間に収めたい。一方、受講生側は、土曜日に授業日程があることを嫌がる。そうすると平日の５日×２週に収めるために調整を行う必要がある。だが、一日あたりのコマ数を増やすといっても、学生の集中力の問題もあり、１日に１コマずつ増やすというのが限度で、せいぜい１日分くらいしか短縮できない。

実は、66 コマというのは、キャンプの主催者である應用英語系と應用日語系で決めたものであるので、厳密な根拠はなく、今後、應

用英語系と應用日語系による話し合いで改正できる余地がある。

たとえば一日6コマとして、平日（5日）を2週間と考え、上限を60コマにすれば、最初の土日で来台し、月曜日に開始の後、次の土日は休息・観光・準備などに当て、2週目の金曜日で授業を終わらせ、最後の土日に帰国というようなスケジュールが可能である。あるいは66コマをどうしても動かせないときは、たとえば66コマの一部を参加学生による実習生への近郊の観光案内[57]というような形にすれば、より非日常的な空間を演出でき、キャンプの趣旨にもあう。学外での実施となるので、安全面や主催者側の責任の及ぶ範囲という問題もあるが、検討の余地はあろう。

6.3. 宿泊場所

実習生・引率教員の宿泊場所として今年度用意したのは、普段は学生寮として使用している第六宿舎である。大学の敷地内にあり、近郊の各種商店にも近い。何より使用料が安いということがメリットである。また、代替施設がホテルしかなく、費用が高くついてしまうこともあり、寮の部屋が確保できる日程に開催する（あるいは利用できるように交渉する）というのが現状では最良の選択である。

なお、宿舎自体は布団の持込が必要であった。保管するスペースや衛生面の問題などがあり、今後も布団の購入[58]はお願いすることになるだろう。

6.4. 教室

キャンプで使用する教室は、授業がない夏季休暇の時期ということもあって、事務室のある棟の教室が使えることになっている。しかも、1人ずつのコンピューターを備えた教室や、聴解などに使われる教室がある。

[57] これは実際、授業のない土日に、一部の学生が観光案内をしてくれたことがあるのだが、それをプログラムの一部にすれば一石二鳥というわけである。
[58] 実際は学科が代わりに購入と搬入を行う。

しかし、キャンプの時期は新学期を控えて時々メンテナンスが入る可能性があるため、急に教室変更せざるを得ない場合がある。あらかじめ、学科の助教を通じてメンテナンスの日を確認する必要がある。また、食品を扱う授業などがある場合、その際は隣の棟の一般教室を使うが、これも事前に利用の計画[59]を立て準備しておく必要がある。

なお、アンケート項目16に現れた不満としては、アンケート実施時に使用した教室（それ以前も使用したことがあった）の椅子の素材と形状が悪く、それが不満となっていたようであった。できるだけいい教室を確保することも求められる。

6.5. クラス分けについて

これについてはすでに、「4.1. 担当クラス・レベル」でも述べた。受講生側としては、習得レベルによるわけ方に慣れており、普段のクラスのメンバーがキャンプのクラスにもおり、また友人同士が同じクラスになるのを望んでいるということがある。違う編成をする場合でも、しっかりと趣旨を説明しながら、（単に学生の要望のとおりにするということではなく）双方の考えを擦り合わせるなどして、説得力をもったクラス編成が必要であろう。

6.6. コンピューターと携帯電話

これは特に、実習生の生活面に関わる問題である。

期間中のコンピューター利用（インターネットやメール）については、学生寮の部屋にはLAN設備があるが、あらかじめ申請しておかないと使えないことになっている。期間中のメールはweb mailなどに転送しておくなどして、学科のコンピューター教室等を利用してもらうようにする。

[59] 96年度2学期（2008年2月）からは、学内の省エネ等の方針により事前に申請がないと教室に通電しないようになってしまったため、よりいっそうの計画性が求められる。

また、携帯電話は滞在期間中だけ現地で揃える手段はあることはあるが、手続きが煩雑なため、少々高くても日本国内で国際電話（とインターネットメール対応）の携帯端末を用意するのが確実である。料金の問題もあるが、緊急時の連絡手段の一つとして、可能なら用意してもらうようにするのがよいだろう。

6.7. キャンプ自体の趣旨について

ここでは、実際面の問題というより、このイベントの根本的な考え方について述べておきたい。

南台の側にとっては、学生の日本語学習が、単に教養や試験の科目へのアプローチではなく、実際に「インターアクション[60]」の機会を得られるようにという趣旨で「外語實務實習」を設けてあるので、キャンプという語学研修もそれに合うようにするべきである。

もちろん、普段の授業でも筆者のようなネイティブの教師が行う授業（会話など）は、実際のコミュニケーションやインターアクションを意識させるような内容を考えている。しかし、それとて一部の学生にとっては「日本人（ネイティブ）とのコミュニケーションの機会」という意識より「教師が行う試験科目のひとつ」という認識が先に立つということがある。

そのため、キャンプとして成立[61]させるには、教師以外の日本人、とりわけ同世代の若者（学生）とのインターアクションであるというのが、（最大公約数的なものかもしれないが）学生の動機付けには有効であろう。

一方、日本から講師として来てもらうという場合、単なる異文化交流の機会に参加という意識だけでは、１，２日ならともかく、２週間のプログラムについて主体的に動いてはくれないだろう。つまり、日本語教育に従事するというモチベーションが必要であり、「日本語教育実習」という側面がなければ、決して少なくない費用[62]を負担してまでプログラムに参加するということにはならないと思われる。

そして、「日本語教育実習」となったときは、教師以外の日本人（特に学生と同世代の日本人学生）に対して非常勤講師を迎えるくらいの対応では不適切である。これについては、実習生側の引率教員の意向もあるが、「４．実習状況について」で述べた一連の過程で実習内容についての指導を南台側でも積極的に行うなど、（物心両面での）サポートの体制を整えていかなければならない。

たとえば、片桐史尚（2002）／河村静江、二郷美帆（2003）／二郷美帆、河村静江（2003）に紹介されているような、明海大学の学生による銘傳大學の実習を「日本語教育実習」というなら、現状の南台のキャンプは、「日本語教育実習」とはいいにくい。

南台のキャンプの場合、授業や教室活動そのものについては、実習生（と引率教員）の裁量に任せている。しかし、実際には実習生側は初めて学習者に教えるという場合がほとんどであり、こちらの期待する内容を行ってくれるとはかぎらない。実習生側にとっても、自信を持って行っているわけでもないから、こちらから「とにかくお好きにどうぞ」というのは、自主性を尊重しているようでいて、あまり責任を負っていないということになってしまう。教員養成の機会を提供しているということを理解・自覚したうえで、単純にコーディネーターとしての役割だけでなく、主催者側として、先輩の教師としての指導が、（教案作成などに）もっと入ってもいいのではないかと考える。

もちろん、それぞれの機関によって条件や趣旨が同じではないから、どのやり方がいいかというのは一概に良し悪しの判断はくだせないということはある。

しかし、南台の学生にとっての教師以外の日本人との「インター

[60] ここではネウストプニー（1995）にあるような、言語能力・社会言語能力・社会文化能力すべてを含み、実質行動を伴った活動を指すこととする。

[61] もちろん、学生の募集という点においては、現状では「授業（卒業単位）」という条件をつけざるを得ないが、学生の満足感を上げてゆくようなイベントにしてゆくことが必要である。

[62] 現状では渡航費までの負担はできないため。

アクション」の機会、実習生にとっては、「日本語教育」の現場を知り、教員養成の機会であるという双方のメリットを満たすような運営の方法を模索していかなければならない。そのために、どんなことができるのかということを議論していく必要がある。

7．おわりに

以上、國學院大學の大学院生・学部生による南台科技大學夏令營（サマーキャンプ）について述べてきた。

このキャンプの試みが始まって、5年余りが経過した。毎年行っているものではあるが、運営その他あらゆる面で、まだ安定した恒例行事とは言えず、常に試行錯誤の状態である。

今回述べた中には書ききれなかったものも含め、細かい問題・課題も多く存在している。中には対策が難しいものもあり、関係各機関の都合や利害関係などがあるが、キャンプに対する理解を求め一つひとつ解決してゆくしかない。

また、この「キャンプ」というプログラムについての考え方も引き続き検討しなければいけない。

いわゆる異文化接触・異文化体験というのがメインなのか、それとも日本語教師養成のための日本語教育実習に近づけるのが良いのか。考え方としても、また実際に行えるかということも今後議論すべき問題である。そして、今回は主催者側としての見解、受講生からのフィードバックは少し行えたが、実習生からのフィードバックはうまく反映できなかった。これも今後の課題である。

しかし、南台側の学生にとっても実習生にとっても、キャンプ開催によって交流を持つことは非常に有益である。この試み（イベント）がよりよい形で継続していくよう努めていきたい。

参考文献

飯田明美（2005）「南台科技大學夏令營（サマーキャンプ）における明海大学生実習活動報告」『南台應用日語學報』第5號 pp. 166-190

片桐史尚（2002）「海外日本語教育研修における成果と課題―銘傳大学研修を例として―」『銘傳日本語教育』第5號 pp. 35-50

河村静江、二郷美帆（2003）「台湾・銘傳大学における日本語教育実習（1）―カリキュラムとその問題点―」『銘傳日本語教育』第6號 pp. 83-106

久野マリ子編（2008）『平成19年度（2007）日本語教育実習報告―南台科技大学におけるサマーキャンプ―』※久野マリ子教授（國學院大學大学院文学研究科・國學院大學文学部）と参加学生（実習生）によるもの）

J・V・ネウストプニー（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店

二郷美帆、河村静江（2003）「台湾・銘傳大学における日本語教育実習（2）―実習生の教授活動における問題点―」『銘傳日本語教育』第6號 pp. 108-128

南台科技大學
2010 年專業外語教學國際學術研討會

2010 International Conference on Language Education for Specific Purpose Southern Taiwan University

論文集

主辦單位：南台科技大學人文社會學院 應用英語系 應用日語系
協辦單位：教育部、行政院國家科學委員會、財團法人交流協會
合辦單位：新潟大学大学院現代社会文化研究科
日　　期：2010 年 5 月 21 日
地　　點：南台科技大學圖書大樓 E 棟　國際會議廳

Organizer: Applied English Department and Applied Japanese Department, Southern Taiwan University
Date: May 21, 2010
Venue: Nien-tze International Conference Hall

南台科技大學 2010 年
專業外語教學國際研討會論文集

發行人　戴　謙　(南台科技大學校長)
總編輯　李新鄉　(南台科技大學人文社會學院院長)
編輯委員
校外委員
林蔚華　高雄應用科技大學
車蓓群　政治大學外文系
魏廷冀　高雄師範大學台灣文化及語言研究所
張淑儀　嘉義大學外國語言學系
邱榮金　高雄第一科技大學應日系
簡月真　東華大學民族語言與傳播學系暨民族發展研究所
蔡錦雀　吳鳳技術學院應日系
陳麗君　國立成功大學台文系
柳瀨善治　靜宜大學日本語文學系
校內委員
沈添鉦　南台科技大學應英系
鍾榮富　南台科技大學應英系
陳連浚　南台科技大學應日系
鄧美華　南台科技大學應日系
陳志文　南台科技大學應日系
伊藤龍平　南台科技大學應日系
神作晉一　南台科技大學應日系
執行編輯　林尹星 陳瑜霞 村越真紀 吳笛 駱昭吟
出 版 者　南台科技大學人文社會學院應用日語系
地　　址　71005 台南縣永康市南台街 1 號
電　　話　(06)253-3131　分機 6301
傳　　真　(06)301-0007
網　　址　http://japan.stut.edu.tw
出版日期　中華民國 99 年 8 月初版

ISBN 978-986-6975-34-9　(平裝)